札幌医科大学　医療人育成センター紀要　第 13 号　1 ～ 2（2022）　報告

北海道生命倫理研究会の活動報告

船木　祝

札幌医科大学医療人育成センター　教養教育研究部門哲学・倫理学教室

A Report about Activities of Study Group of Bioethics Hokkaido

Shuku Funaki

Philosophy and Ethics Division, Medical Education Center, Sapporo Medical University

2012 年 8 月、札幌医科大学の旗手俊彦と船木祝が中心となり、北海道において「北海道生命倫理研究会」が発足、第 1 回研究会が開催された。会発足の目的は、アメリカで患者の権利を守るために成立してから半世紀余りが経った生命倫理を検証し、今後の生命倫理のあり方を問うということである。アメリカ流の生命倫理は「自己決定」を基軸におき、ヨーロッパ、アジア、そして世界に広がりをみせ、大きな影響力をもった。しかし近年、その進展とともに、意識不明の患者や認知症患者への対応など、おさまりきらない問題も浮かび上がってきた。新出生前診断、遺伝子診断など先端科学技術のさらなる進展と高度化により、新たな生命倫理問題への対処の方策も問われている。また、本研究会は、北海道の地で立ち上げられたという性格上、地域医療のさまざまな問題に対応していくという志もある。さらに、研究不正に関して大きく取り沙汰されている、研究倫理の問題を検討する機会をもつことも目指している。

研究会主催のセミナーは夏季と冬季の年 2 回開催され、機関誌は原則年 1 回発行している。北海道生命倫理研究会セミナーは、これまで 18 回開催され、機関誌「北海道生命倫理研究」は第 9 号までの発刊を迎えることができた。

2019 年度夏季セミナーでは、三浦哲嗣「医学教育と哲学」、永森克志「北海道における在宅医療の現状と課題」の二つの講演、および船木祝「人生の最終段階としての老年期」の研究報告、および粟屋剛「『人間形成論』の取り組み」の教育講演がおこなわれた。2020 年 3 月に発行された機関誌「北海道生命倫理研究」Vol.8 では、第 1 講演と第 2 講演を踏まえた、以下の二つの報告が掲載されている。三浦哲嗣「医学教育と倫理学：臨床倫理担当の臨床系教員としての考察」では、生命を扱う医療の臨床現場における具体的判断のためにも、生命、医療、医師という職業について哲学的に考察することの必要性を論じたものである。井上浩太郎、永森克志「北海道における在宅医療の現状と課題」では、超高齢社会の日本において、尊厳を保ちながら最期を迎えることの重要性が唱えられ、持続可能な医療として在宅医療が注目されてはいるが、現状は満足した状況になっていないこと、そして在宅医療の課題を報告したものである。当機関誌では、三つめの報告として、2018 年度冬季セミナーでの講演に基づく、中山ヒサ子「緩和ケアにおける音楽療法の意義―全人的アプローチの手段として―」が掲載されている。ホスピス・緩和ケアにおける音楽療法の効果に関する海外の報告を踏まえ、緩和医療の現場における音楽療法の実践事例を報告したものである。当機関誌には、他に収録されているものに以下のものがある。小館貴幸「在宅介護におけるジリツと傷つきやすさ」（原著論文）は、文字盤や生体信号スイッチの具体的方法に基づき、ジリツと傷つきやすさが相互に否定しあうのではなく、両者のバランスを保つことの重要性を論じたものである。永田まなみ「終末期ケアを体験した看護学生を対象とする過去 10 年の研究論文の検討―学生の感情・変化と学び・求められる教育的支援―」（総説）では、終末期ケア実習に参加した看護学生が負の感情と対峙しながら、試行錯誤を経て学びに至るまでの教育的支援を扱う研究論文が整理、検討されている。小海康夫「研究をキーワードとして高齢者の健康を支援する試み―『るもいコホートピア』のご紹介―」（研究報告）は、各種資

DOI: 10.15114/jcme.13.1

源が整っているとはいえない地方都市における、高齢者の健康支援のための社会活動の現状、課題、展望について報告したものである。旗手俊彦「日本における医療安全の取り組みの経緯概観」(研究報告) は、過去約 20 年間の医療安全に関する取り組みを、三期に分けて整理したものである。当機関誌はまた、日本医事法学会、日本医学哲学・倫理学会大会、医療の質・安全学会学術集会のレポートも掲載し、日本の生命倫理研究全体を視野に収めようと試みている。

2019 年度冬季セミナーは、新型コロナウイルス感染症拡大のため、中止となった。

2020 年度夏季セミナー (オンライン開催) では、森口眞衣「『東洋医学』と『アーユルヴェーダ』の位置づけをめぐって」、樋之津史郎「臨床研究デザイン選択とインフォームド・コンセントの手順」、北澤一利「介入のない健康づくり」の三つの講演がおこなわれた。2021 年 3 月に発行された機関誌「北海道生命倫理研究」Vol.9 には、第 1 講演を踏まえた、森口眞衣「『東洋医学』をめぐる文脈の問題―概念と名辞の関係整理について―」(原著論文) が収録されている。「西洋医学」との対比で用いられる「東洋医学」の概念の多義性と今日の新たな使用法を整理したものである。また、当機関誌には、会田薫子「Advance Care Planning に関する日本老年医学会『提言』の意義」(依頼論文) が収録されている。アドバンス・ケア・プランニングをめぐり、autonomy を軸とした、厚生労働省のエンドオブライフ・ケアのガイドライン (2018 年) と、日本老年医学会による、家族関係や社会的文化的特徴を踏まえた「ACP 推進に関する提言」(2019 年) とを比較検討したものである。

2020 年度冬季セミナー (オンライン開催) では、宮嶋俊一「ナチズム期ドイツにおける『安楽死』政策への道程」、大西浩文「COVID-19 と健康リテラシー教育」、横田伸一「感染症に対峙する社会のありかた―新型コロナウイルス感染症から考える―」の三つの講演がおこなわれた。「北海道生命倫理研究」Vol.9 には、第 1 講演を踏まえた、宮嶋俊一「ナチズム期ドイツにおける『安楽死』政策への道程」(研究報告) が掲載されている。「安楽死」という名の下に殺人がおこなわれた、ナチス・ドイツのホロコースト、およびその先駆けとなる T4 作戦に至るまでの、エルンスト・ヘッケルの思想などの歴史的背景をまとめたものである。当機関誌は、日本医事法学会、日本生命倫理学会年次大会、医療の質・安全学会学術集会のレポートも掲載している。

2021 年度夏季セミナー (オンライン開催) では、林康弘「パーソナライズド・AI システムとプライバシーの確保」、上田泉「在宅看護分野から考える―コロナ感染症 (COVID-19) 流行によるリスクコミュニケーション―」の二つの講演がおこなわれた。また、船木祝、山本武志、宮嶋俊一、粟屋剛は、文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 (C) Nr.21K01836 による、新型コロナウイルス感染症拡大下における高齢者に関する調査研究の報告もした。

今後とも、生命倫理に関する研究成果を学内外の研究者・市民等に報告し、学際的な議論の場となることを期待している。

なお、北海道生命倫理研究会誌の内容は、JAIRO Cloud (https://sapmed.repo.nii.ac.jp) で閲覧することができる。

北海道生命倫理研究会ホームページ：http://web.sapmed.ac.jp/hokkaido-bioethics/index.html